

防 止 策 と 対 応 策

---

# 伴侶への 虐待

教会員のために

©1998 末日聖徒イエス・キリスト教会版權所有  
印刷地：日本

英語版承認9/97  
翻訳承認9/97

『Preventing and Responding to Spouse Abuse』 翻訳  
Japanese  
35869 300

「夫婦は、互いに  
愛と関心を示し合う……という  
厳粛な責任を負っています。……

神の計画により、父親は  
愛と義をもって自分の家族を  
管理しなければなりません。  
また、生活必需品を提供し、  
家族を守るという責任を負っています。  
また母親には、子供を養い育てるという  
主要な責任があります。

これらの神聖な責任において、  
父親と母親は対等のパートナーとして  
互いに助け合うという  
義務を負っています。……

わたしたちは警告します。  
貞節の律法を犯す人々、  
<sup>はんりょ</sup>伴侶や子供を虐待する人々、  
家族の責任を果たさない人々は、  
いつの日か、神の御前<sup>みまえ</sup>に立って  
報告することになります。」

「家族——世界への宣言」  
『聖徒の道』1996年6月号，10-11



## はじめに

伴侶はんりょに対する虐待とは、悪意をもって妻または夫に接したり、あるいは伴侶を不当に扱うことにより、傷を負わせたり、重大な罪を犯したりする行為です。これは夫婦が「キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように」互いを愛することができない状態を説明する言葉です（エペソ5：25）。伴侶に対する虐待行為はいろいろな形を取って現れます。不注意で気づかずに行ってしまうものもあれば、意図的で悪意に満ち、そして暴力を伴う虐待もあります。どのような形であれ虐待は不正な行為です。虐待行為はその対象となる人に重大な影響を与えるだけでなく、虐待を行う人自身の靈性にも影響を及ぼします。虐待行為は家族をも巻き込んで苦しめるものです。伴侶が虐待を受けていると、子供たちまでもが危険な状態に追い込まれることがあります。虐待されている親を見ている子供たちは情緒を傷つけられ、その影響は成人した後にまで尾を引くことが多いのです。いかなる形態を取るにせよ、それは悲劇であり、救い主の教えに反するものです。

家族の中の成人、および関与するほかの人々は虐待を阻止し、傷ついた人を保護して助けを求める責任があります。虐待を受けた人には、家族をはじめ人からの思いやりに満ちたいたわりが必要です。あるいは専門家の、救い主の教えと一致した援助が必要なこともあります。また、虐待している側も援助が必要です。虐待の

事実を明るみに出さないことで、罪を繰り返す場合が往々にしてあります。罪を繰り返し犯す人の多くは、自分の行為が最終的な結果を招くところまで来ないと、なかなか変わりません。家庭内で行われている虐待に、家族の一員または第三者が気づいた場合は、監督に話をして、助言と援助を求めるべきです。

## 虐待行為の始まり

子供への虐待行為と伴侶への虐待行為はいずれも、一見何でもないようなことから始まります。相手の能力や力量をけなしたり、四六時中批判的であったり、侮辱的な態度を取ったり、非難したり、話し合いを拒んだり、ごまかしたり、相手に罪悪感を抱かせたり、約束をしては破ることを何度も繰り返したり、おびえさせたり、肉体的な危害を与えると脅したり、理由もなく非難したり、器物を破壊したりすることなどを例として挙げることができます。

相手を攻撃していながら、それに気づいていない人もいます。ある人々は自分の行為がどれほど大きな影響を与えるかを理解していません。しかし、虐待が行われていることに気づいたら、家族全員特に父親と母親は率先して自分たちが家族の一人一人とどのような関係にあるかを調べてみなければなりません。何かの行為がだれかを傷つけていることに気づくだけで、行動を改めるようになる場合もあります。

## 伴侶への虐待に対する認識

伴侶に対する虐待行為には精神的虐待、肉体的虐待、性的虐待があります。精神的虐待には、絶えず非難すること、相手をばかにするような言葉を言うこと、不義による支配と強制、威嚇、不干渉、威圧、ごまかし、無視などが相当します。肉体的虐待には、押したり、首を絞めたり、引っかいたり、つねったり、監禁したり、たたいたりするなどの肉体的な暴力行為が含まれます。性的虐待には、精神的および肉体的なものもあり、性的いやがらせ、苦痛を加えること、力づくで自分の意思を通そうとしたり、威圧したりすることが含まれます。

伴侶に対する虐待行為は回を重ねるごとに過激になる傾向があります。口論や偶発的ないらだちが発端となって虐待行為へと発展することもあります。一般的には怒りや脅し、ごまかし、肉体的または性的行動によって相手を支配しようとするところから虐待行為へと発展します。虐待行為が繰り返し行われる場合、虐待する人を満足させようとしたり、心の落ち着きを取り戻させようとしたりあるいは理性に訴えようとしたりしても、虐待行為をやめさせることはほとんど不可能です。また虐待を行った人が謝罪したり、約束したりしても、それによって暴力行為が終わることはほとんどありません。



## 伴侶への虐待の防止

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は既婚者に向けて次のように述べています。「わたしたち一人一人は別個の存在です。一人一人が個性を持っているのです。……個性の違いを度外視して、お互いに尊敬するのです。……わたしは長い間感じていたことなのですが、結婚生活における幸福とは、ロマンスのようなものではなく、むしろ伴侶が心に何の心配もなく、満ち足りた生活を送れるよう配慮することだと思います。これには弱さや失敗を喜んで許すことも含まれます。」（『幸福な家庭のいしずえ』5）結婚生活における問題のほとんどは、これらの原則を理解していないことから起きています。

結婚生活において、どのような形であれ伴侶を服従させようとしたり、支配または強制しようとしたりすると、夫婦の関係にひびが入ります。協力関係にある夫婦がそれぞれに持つ感情や関心、好き嫌いは、同じように大切であり、相手から同じように尊重されるべきものです。

夫婦はお互いの意思の交流、接する態度について、頻繁に評価して見る必要があります。そのための方法として、次のような質問を自分に問いかけてみるとよいでしょう。

- わたしは伴侶との関係で、ささいな事柄をうっとうしく感じてもそのまま放置しておいて、やがて思いやりのない行動を取ったり、不親切な言葉を言ったりしていかないだろうか。
- わたしが心に感じている怒りは伴侶や子供たちと直接関係ないのに、わたしは家庭で不満を募らせて家族を傷つけるような言葉を言っていないだろうか。

落胆や不満が原因となって生まれる思いやりのない行動や不親切な言葉は、虐待行為の初期の兆候となる場合があります。早急に改めておかないと、これらは家族を精神的、肉体的に苦しめる重大な虐待行為の温床となることがあります。

虐待行為の兆候が認められたり、明るみに出た場合には、結婚生活からそれらを取り除き、家族が平安と喜びを得るために、継続して努力する必要があります。

## 伴侶への虐待に対応する

虐待行為の犠牲者は最大の関心と助けを必要としています。神権指導者、家族の中の成人、その他の人々は虐待行為をやめさせ、安全を確保し、虐待行為を受けた伴侶が立ち直るようあらゆる手立てを講じなければなりません。指導者と家族はまた、虐待を行った人の霊的な必要に対処し、当人が悔い改めて、健全な人物になるよう助けなければなりません。

虐待行為に対する最善の対応方法は、暴力や虐待行為を許しておくわけにはいかないことを虐待行為の犠牲者と、関与する指導者、家族、友人がはっきりと述べることです。虐待行為がすでに日常的に行われている場合は、通常は犠牲者ですが、だれかがそのことをほかの人に知らせる必要があります。状況によっては、専門家を慎重に選んで犠牲者と加害者の双方にカウンセリングを受けさせる必要があるかもしれません。虐待行為を行う人が悔い改めて、行動を変えるためには、教会の宗紀処置が必要とされる場合もあります。助言を与え、支援する際の中心的な役割を果たすのは監督です。

## 虐待行為の常習者

すべての教会員は自分自身と自分の行いを振り返って、伴侶に対して傷害や苦痛を与えたり、<sup>きよ</sup>聖さを失わせること、不純な行為、そのほか主の前に邪悪とされるような事柄を行ったりしていないかどうかを調べてみななければなりません。虐待の罪を犯しており、満足のいくような改善を図ることができない人は監督を通して助けを求める必要があります。主は次のように言われました、「人が罪を悔い改めたかどうかは、これによって分かる。すなわち、見よ、彼はそれを告白し、そしてそれを捨てる。」（教義と聖約58：43。1ヨハネ1：9；モーサヤ26：29も参照）

ある人々は自分の行いに良心のとがめを感じ、罪を告白して自ら進んで悔い改めの道を歩みたいと考えます。これに対して、自分の悪い行いを認めようとせず、そうしたことは他人のせいだと主張する人もいます。虐待行為を行っている人は通常、その行為に対する責任を認め、罪を告白し、霊的な助けと時には専門家の助けを受け入れるようになるまで、あくまで自分の行いを通そうとします。虐待行為の常習者はほとんどが、たとえ自分の行いを深く悔いて、虐待するような行為を二度としないと決心しても、なかなか変わることができません。彼らは自分が犯した道徳と法律に反する行為の重大さを十分に認めるだけの霊的な強さを身に付けなければ、改めることができません。虐待行為を行った人は自分の罪をすべて監督に告白し、危害を与えた人々の前で自分の罪を認め、虐待行

為をやめなければ、悔い改めをしたことにはならないのです。

ヒンクレー大管長は虐待行為に関して次のような勧告を与えています。

「不幸にも、暴力的な男性と結婚してしまった人も少なからずいると思います。そのような男性の中には、日中は人々の前にこやかな顔をしていながら、夜になって家に帰ると、自制心を忘れ、ささいなことに腹を立て、怒りを爆発させる人がいます。

このような悪と野蛮な振る舞いをしている男性は、神の神権にふさわしくありません。そのようなことをしている男性は、主の家に入る特権にふさわしくありません。わたしは、自分の妻や子供たちから愛される資格のない男性がいることを残念に思います。自分の父親を恐れる子供、また自分の夫を恐れる女性がいます。わたしの声を聞いている人の中に、このような男性がいるとすれば、わたしは主の僕として、その人を叱責し、悔い改めるよう求めます。自分自身を抑え、感情をコントロールしてください。あなたを怒らせている原因の多くは、ささいなことのはずです。それに比べて、あなたが自分の怒りと引き換えに払う代価は実に恐ろしいものなのです。主に赦しを請うてください、妻に赦しを請い、子供に謝る必要があります。」（「教会の女性」『聖徒の道』1997年1月号、77）

これは虐待行為を行う妻に対する勧告でもあります。

## 終わりに

大管長会は次のように宣言しています。

「家庭生活における幸福は、主イエス・キリストの教えに基づいた生活を送るときに達成されるに違いありません。実りある結婚と家庭は、信仰と祈り、悔い改め、赦し、尊敬、愛、思いやり、労働、健全な娯楽活動の原則にのっとして確立され、維持されます。」（「家族——世界への宣言」『聖徒の道』1996年6月号、10-11）

伴侶に対する虐待行為を放置しておく、夫婦の間ならびに両親と子供たちの間に神が定められた関係を取り返しのつかない状態にまで傷つけてしまうことになります。末日聖徒の夫婦にとってこの邪悪の種を取り除くこと以上に大切なことはありません。



